鴛鴦曲

秋元蘆風著

鴛鴦曲

秋元蘆風著

序

『日本は、男尊女卑の國也。されど、梅川忠兵衛の如き、小春治兵衛の如き、お半長右衛門の如き、院本にありては、悉く女の名を先きにして、男の名を後にす。西洋は、女尊男卑の國也。されど、君が譯せる、ゲーテのヘルマン、ドロテーアの如きは、男の名を先きにし、女の名を後にす。これは、一見、不思議なり。』と云へば、『何も不思議は無し。男女によりて先後するにあらで、音調によりて、先後するなり。されば、シルレルのヘロー、レアンデルの如きは、音調によりて、女を先にし、男を後にしたるなり。』といふ。『さて、君が、ゲーテのヘルマン、ドロテーアを翻譯し

たる、叙事詩「鴛鴦曲」の鴛鴦は、どちらが女性にして、どちらが男性なるか。』と問へば、『序文を書くに、そんな下らぬ詮索は、入らぬことなり。われは、獨逸學者なり。そのやうな漢字の詮索は、あべこべに、われより君にうかゞひたきものなり。』といふ。『われとても、知らざるなり。されど、知る、鴛鴦は、動物にて、雌雄が最も深く相愛するものなり。』『それくらゐの事は、三尺の童子も、なほ知れる所なり。』『然し、その鴛鴦の雌と雄と、どちらが愛が深きかは知るまじ。』『知らず。』『これは、さる銃獵家のうけうりなり。鴛鴦は必ず雌雄並び居るもの也。然るに、先づ雄をうてば、雌は飛び去つて、また還らず。雌をうてば、雄は、一時飛び去るも、また死したる雌のそばにかへり來る。雌をうてば、雄も共にうつを得れども、雄をうちては、雌はうつを得ず。女性よりも、男性の方が愛がふかしとの事なり。』『その講釋も、さることながら、それよりも、本篇に適切なる講釋をしてくれ給へ。』『ゲーテの傑作なりと聞きて、ちよと、のぞいて見たれど、字引と首引するが、うるさくて、弱りて、やめたり。全く門外漢なり。』『さらば、余の譯をよみ給へ。』『いづれ、ゆッくり讀むべけれど、早手廻はしに、君の口より、ざつと梗概を聞きたし。』と云へば、くはしく梗概を語る。『多謝す、〳〵、はじめて、ヘルマン、ドロテーアの何た

るがゞ、わかりたり。』『唯、禮云ふだけでは、序にならざるべし。』『菲才淺學、余の如きものが、詩聖の傑作を是非すべき資格あるべくもあらず。唯われは、君が獨逸語に精通せるを知る、また韻文に長せるを知る。殊に原著が韻文なり、それを君の學力と筆力とを以て、同じく韻文に譯したる用意と苦心とは多しとすべきなり。よし〳〵、何か序文の工夫せむ。』とうけあひしを、洩れきゝしまゝに、しるせりとぞ。

明治四十年一月

大町桂月

序

嘗て蘆風君と會談の折、どうです君、一つ臺灣の彩票でも買つて儲けやうぢやありませんか」といへば、君首を傾けて曰く、「サイヒョウと云のは何ですか、どんな字をかくんです」と。蘆風君は彩票の何物たるかを知らず、貯蓄債券の何物たるかを知らず、抑金錢の何を意味するかを知らず、一切の物質界を知らず、唯日夜、詩の境、美の國にのみ逍遙するの人なり。故田口醫學博士は解剖室に引籠りて日清の大戰爭をも知らでありき、君の詩に於ける亦實にこれに類せり。骨俗にして皮詩なる者、如何でか眞に詩を解し詩を作るべき。君の如く骨

まで薫る詩の人にして、始めて、眞に詩を解し詩を作るべきなり。余去秋、鴛鴦曲の草稿を覽、再誦三誦夜の更くるを知らず、思へらくこの高興の所因は、原作者ゴェーテの眞詩人なるにあると共に、正しく譯者蘆風君の眞詩人なるにありと。

明治四十年一月二十日

同雲空に凝る朝

辱知　沼波瓊音識

序

日本詩壇に物語歌（バラッド）風の長詩も起りさうなものだとは、久しい以前からの話で、別に珍しくない說だが、起りさうなと云ふ言は、今日でも矢張繰返されて居る。一朝一夕に起るべきものでない、と云ふ事は、一般にも合點が行くやうになつた。で、或るものは新曲の方面から、或るものは劇詩の方面から、或るものは獨立した詩體を以て、神話、傳說、物語類を詩にしやうと試みて居る。

早晩、なにものかゞ築き上げられることは確かであらうけれど、今の處は形式すらも一定しない。又此形式がなか〳〵むつかしいの

で、日本の物語歌とも云ふべき德川時代の、各種のうたひ物の形式を踏襲したでは、迚も新思想を盛る器として滿足が出來ない。されば と言つて、現代の口語其まゝを詩に用ゐる事も困難、右につきあたり、左につかへ、工夫すればする程變なものになるので、形式も定まらないやうな譯である。

けれども、準備智識は大いに貯へねばならぬ。西歐の長篇などを研究して見るのも、好い方法であらう。秋元蘆風君は獨逸の詩聖に親炙し、其譯も二三冊ある。今又ゲーテの「ヘルマン、ドロテーア」を、流麗温雅な詩筆に譯して出版の運びに到つた。數年以前、自分にも此の詩を譯して見よと勸めた人があつたけれど、迚も詩には、と言つて退いたが、潛かに自分の力の足りないのを嘆じた。秋元君の歌、素より完全な譯風とは言へなからうけれど、此大膽な試みが、如何に多くの詩人に心強く感ぜしむるであらう。事業としても、君の骨折は大いに推奬せねばならぬ。請に應じて一言を卷頭に書す。

明治四十年一月

河井醉茗

序

この詩は、ゴェーテの傑作たる、叙事詩の長篇 Hermann und Dorothea「ヘルマン・ドロテーア」を骨子として成れるものなり。假に之を名けて、叙事詩「鴛鴦曲」といふ。

ヘルマンとドロテーアが物語は、さきに散文譯によりて、一二その梗概を傳へたるものなきにあらねど、余が玆に之を韻文に飜譯したるは、原作が、既に同じく韻文なればなり。

原作は、即ちホメールの古詩に倣ひたるものの、フォッスが「ルイーゼ」と其類を同うするものにして、斯かる長曲を譯さんには、素より尙ほ多くの工夫と修養とを要すべきものなる

事は、余の竊に信ずる所なれども、昨夏偶〻原詩を誦するに際し得たる所の感興をほしいまゝに筆に移して、之を邦韻に試みたるは、即ち此の一篇なり。譯詩素より拙劣、之を以て到底詩聖が金玉の妙音を聞く能はざるは言ふ迄もなけれど、此作にして若し、未だ叙事詩の發達を見ざる現今の詩界に、いさゝかたりとも參考の資材を供し得んにはこれまことに作者が望外の光榮と謂はざるべからず。そは兎に角、余は、我國の詩界に、益〻叙事詩の發達せん事を希求する切なる者なり。

余は、此書の出版に關して、親しく斡旋の勞を執り給ひ、かつ優渥なる序文をも賜へる、余が十餘年愛敬親炙する新體詩家、河井醉茗大兄の厚意を感謝し、併せて又、此書の爲めに、序文を惠み給へる、明治文壇の偉勳大町桂月先生及び文學の先進、沼波瓊音大兄の厚意を深く感謝す。

明治四十年櫻花の頃　　根津權現社頭に於て

譯者　秋元喜久雄　識す

目次

第一歌
第二歌
第三歌
第四歌
第五歌
第六歌
第七歌
第八歌

第一歌

一

秋の暴風の吹き止みて、
騒がしかりし草も、木も
静まり果てし野邊の如、
街衢も、市場も静まりつ。
町は寂しくなりにけり。
前の騒擾は今何處？——

町は寂しくなり果てつ。
百千の民の一時に
滅びも果てし光景か、——
後に殘るは幾人ぞ？
往來の人も、家人も
去りにし跡の寂しさよ！

重き抑壓の堪へがたく、
國を逐はるゝ落人の
隣の村を過ぐるとて、
群れゆく狀を見んものと、
老者も若者も我勝に
物にぞ急る——都人。

事もやあると打聞きて、
爲掛けの仕事その儘に
家をば出でつ、町出でつ。
日照も、塵も物かはと、
一里にあまる驛路を
汗に染みつゝ馳せて行く。

後に殘れる旅籠屋の
主人、妻とが物語——
門のほとりの柳蔭、
話の絲は解かれたり。
『哀れならずや、わが妻よ！
他人の運命を思ほへば——

鳥も吾巣は戀しきに、
誰かは故郷を戀はざらん。
然れど抑壓の堪へざれば、
幾年久しく仰ぎ見し
綠の天や、住み馴れし
故郷の地に別れつゝ。

樂しき郷のあらばやと、
車に、馬に、吾背に
家の財貨を數多積みて、
若者は老者を援けつゝ、
母は吾子を抱きつゝ
外國さして逃れ行く。

あゝ、何なれば天つ日の
吾等が市に暖けく、
彼等が郷に冷きや？
落ち行く群を見んものと、
人は空しく走れども、
人を救ふに何とせん。

實に吾妻よ！ようこそは
艱める群を救ふべく、
衣類、食物、飲料の
品したゝかに持たせつゝ
息子を疾く送りたれ。
吾が命令もあらぬ間に。——

彼が驅り行く馬車は、今
廻る轍の最疾く、
彼等が群に追ひ付かん。』
夫が言葉うち聞きて
賢しき妻は言ひけらく、
『許させ給へ、わが夫よ！
村をば過ぎる落人の
憐の狀を聞くだにも、
女心の弱くして
先つものは涙かな。
シャツや、ヅボンや、はた上衣、
君が着替の數々よ、——
扨て、更紗地のかの寢衣、
ネルの裏さへ柔かに
印度わたりの產物と聞く、
君が得難き其衣も
今日としなれば惜しからず。
惠與の品と諸共に——』
微笑みつゝぞ主人いふ、
『何を氣遣ふ？わが妻よ！
得難き衣の惜しといへ、
他人を救ふに、今更に
何、あげつらふ事あらん！
恩惠は富者の義務ぞや！。』

『見ませ、わが夫！早や既に群は村をや越えつらん、塵に塗れて、日に燒けて門をば過ぎる二三人。後に續いて歸り來る數は次第に增りつゝ――』

『見よや！み空に一片の雲をも止めぬ晴れやかさ！朝より風の涼しくて、日和は確と定まりぬ。――稻穗うなだれ野に待つに、明日や結實を收めなん。』

二

主人、妻とが物語

進むが間に、どやゝと物見の群は歸り來ぬ。――暴風の跡と瞬間に變りも果てし、かの町の響動は舊に返りけり。

折しも旅舍の門入りて
來る二人の男づれ。
一人は深き交際の
隣の家の藥劑師、
一人は町に名も高き
牧師の君と知られたり。

軈て二人の客人は
庭の柳の樹下蔭、
腰掛の上に座を占めて、
靴の汚塵を拂ひつゝ、
衣嚢ゆ帛を取りいでゝ
顏を拭ひつ、汗ふきつ。

團居の中の眞先に
口を開くは――藥劑師。――
心の憤怒や堪へざらん、
『不興なるかな、世の人の
他人の不幸を外に見て、
私利に喜ぶ心無さ！

他人の館の燒くる見て、
吾家の燒くる思ひ見ず。
滅亡の人の愍然さを
啻に可笑と見るのみか、
餘りといへば、世の人の
輕卒なる擧動よ！

面は人に似たりとも、
心は鬼か、獣か、――
御手の秤おごそかに
神はみ空に待つものを、
軈て其身に廻り來ん
運命ありとも知らずして。』

若き心に任せつゝ
口を極めて罵れば、
言葉静かに、嚴かに
語り出るは牧師なり。――
町の誇と仰がるゝ
智者が言葉や如何ならん。

牧師は口を開きつゝ、
『然なり、わが友、思ひ見よ！
君が爲すなる憤怒
道理なきにあらねども、
若き男子が擧動を
我は咎めじ、あながちに。

「珍奇なるに趣く」は
性れながらの人の性、――
斯る性欲のあればこそ
知恵は次第に進み行け、
「心輕き」は青年の
常の性とも知れよかし。

苦をば變じて樂となし
危難に勝つも此時代ぞ。
軈て齡を重ぬれば、
知惠や、理解や、愈益に
善き行の增し行きて、
昔の罪を償はん。』

言葉果つるを待ち兼ねて、
宿なる妻が只管に
聞かまく思ふは、人の上。
『然はさりながら客人よ！
君等が見もし聞きもせし
事をば我に聞かせずや。』

隣家の友の答ふらく、
『其光景を語らふに
誰か心の慰まん！
悲しき事の數々を
誰か審に語り得ん！
思ふも胸の塞がりて——

然なり、——牧場を下る時、
遠に見えしは砂烟、
丘より丘を傳ひつゝ
影は疾くも見えわかず、
如何なる事のあるやらん、
知らでぞ道は辿りしが、

軈て着きしは谷の村、
大路の方に出でにけり。
谷を横ぎる一筋の
大路のほとり來て見れば、
西ゆ、東ゆ寄り集ふ
物見の人の數々や。

押しつ、押されつ、揉みあひつ、
群れ立つ中を押し開き、
車や、馬や、はた人や、
路をば急ぐ群集は、
然なり、故郷を立ちいでゝ
逃げに艱むの民なりき。

畫なほ暑き此頃の
幾里を遠く來りけん、
生命からゞ〳〵辿り來し
途中の難儀を口々に
訴ふる狀を見るだにも、
男子の胸の痛ましく。

別けて觀る眼も無慙さは、
貴きものも、良きものも、
益なきものも諸共に
車の上に一重ね。
すはや大事の折柄に
何を擇ぶの遑あらん。

想ひぞ起す——二十年の
前の火事の其光景よ！
人の心のあわてゝは
良きも、惡きも見えわかず、
取るべきを捨て、捨つべきを取り、
桶や、硝子や、古籠や、——

益にもたゝぬ、雜物を
後生大事の戯業。——
悲しからずや、わが友よ、
人の心の惑ふ時！
哀れならずや、わが友よ、
人の心の狂ふ時！——

斯くて塵立つ田舍路を
行くや車の、人の數。
亂れ混りつ、後ろより
衝き來る狀は宛然に
山をば下る奔流の
谿間を衝いて馳する如。

或は車の輪に觸れて
足を傷け泣くあれば、
或は馳せゆく荒駒の
蹄に觸れて斃るあり。
女小供の叫喚に
交るは馬や、犬の聲。

或は老人、病人の
床にあるだに得堪へじを、
今、街道の上にして
暑き日照に蒸されつゝ
波立つ塵に塗れては、
生命も軈て絶えぬべし』

力籠めての物語

主人が胸に對へけん、
『先に送りしヘルマンが
救助の効果如何ならん、
人の話を聞くだにも
老いたる胸は痛むかな。

友よ、話の圈を終へて
茲に我等を憩はせよ！
射照る光の暑ければ、
いざ、奥の間に入り給へ。』
主人が言葉もろともに
後に從ふ――皆の者。

三

宿なる家の奥座敷――
窓より見ゆる山川の
眺望もいとゞ涼しきに、
風さへ窓を訪れて、
卓を圍める三人が
話もいつか新なる。

軈て出で來る宿の妻、
其眼光も涼しげに、
緑の露や滴らん、
緑美はしき盃に
葡萄の酒を滿しつゝ
三人が前に捧ぐれば、

鳴るや盃、音清く
主人、牧師が献杯に、――
然れども藥劑師は只獨り
思に耽る面色や、
話の名殘盡きずして、
心は飛ぶか――人の上。

主人は言葉勵まして、
『飲みね、わが友！　快く
葡萄の美酒に蘇れ！
酒は良きもの、甘きもの。
憂きを霽らすは酒なるに、
飲みて愁を晴らせかし！

神の惠の有りがたく
吾等が上に在せば、
何を憂ふる事あらん、
燒け廢れたる吾町の
斯る繁榮を見るにつけ、
神の惠の偲ばしく。』

主人が清き心根の
胸に嬉しく響きけん、
牧師は言葉爽やかに、
『美はしいかな、其心！
確き信念は永久に
神に仕へて變らざれ！』

聖者が言葉もろともに
主人が興や增りけん、
『我、巡歷の折々に
ラインの流見るにつけ、
心は廣く、氣は高く、
胸透く思のありといへ、

あゝ、美はしきかの岸の
敵守る砦とならんとは、——
深く流るゝかの水の
國守る濠とならんとは、——
思はざりきよ！これも亦
御國を守る神の業。

月日重なる戰爭に
戰士の體は疲れ果て、
都も、鄙も、草も、木も
平和を今か望むらん、
軈ては王師凱旋の
芽出度き朝や來るらん。

祭典の市の華やかに
賑しき日の廻り來ん、
斯る吉き日を待ち擇び、
老爺が息子へルマンに
花の嫁子や娶らせなん。——
息子も今や丈延びぬ。』

語りつ、聞きつゝある程に、
遠より響く早駒の
蹄の音は近きぬ。
軈ては門を入り來る
轍の音の喧しき、——
入り來る者や誰ならん。

第二歌

一

使命を遂げし嬉しさに
心は急ぐ家の門、――
鞭うつ駒を走らせて
歸るや家に、ヘルマンは
心の中も何となく
躍るが如き心地して。

疾くも家に着きぬれば、
息子が歸宅待ち佗びて、
救助の効果如何にぞと、
思ひわづらふ母親は
他を殘して立ち去りつ。
吾子を母は迎へけり。

馬車をば下りてヘルマンは
先行く母に導かれつゝ
欣然として入り來る。
父は吾子を勞らひつ、
友は彼をば迎ふるに、
聖者は彼に向ひつゝ、

『美はしいかな、汝が面の
例に似ざる樂しさや！
輝く面の色にだに
嬉しき胸の偲ばれて、
人を惠みし慰藉の
自然と面に見ゆるなり。』

『此はおほけなき仰かな！
母の仰を畏みて
爲しつる今日の行爲を
讃へますなる御言葉と
思へば面の恥かれど、
いでや、審の物語——

君よ、暫く聞き給へ！』

聖者の言に感じつゝ
語りいでたる若人が
言葉はいとゞ嚴かに、
謹慎の色見えにけり。
彼は言葉を續けつゝ、

『人の話を打聞きて、
惠與の料に、母上が
衣類、食物、飲料の
彼よ、此よと擇ぶ間に
數多の隙や移りけん、
馬の用意も早々に、

車の準備忙がしく、
時や過ぎんと鞭疾く
吾門出でし其時は、
餘りに時の遲くして——
早や、歸り來る市人の
女、子供もちらほらと——

落ちゆく群はいつしかに
村をば遠く離れたり。
今宵の宿泊何處ぞと、
路行く人に言問へば、
次なる村と言ふなるに、
鞭打つ駒を急がせて、

行くや、塵立つ並木路。——
彼等が跡を尋ねつゝ
馳せ行く駒の足疾み、
何時かは半を過ぎつらん、
路の傍に見出しは
美くし牛車、一輛の——

車の主や誰ならん、
貴なる人の末路なるか、
車のほとりかしづきて
牛逐ふ者は粗暴の
童子にあらで、雄々しかる
花の盛の少女にて。

長き笞をば振りながら
逐ひゆく足の撓みなく、
さても殊勝の少女ぞと、
思はず揺ぐわが心——
我を見るより少女子は
車を離れ、近寄りつ。

「如何に見給ふ？ わが君よ、
吾等が今日の困難を！——
哀ならずや、常なれば
人に恵は乞はまじを、
今となりては却々に
施與乞ふも困くして。

見ませ、わが君！藁屑の
上に座れる産婦をば！
其はわが主が北の方、
頃しも産の月なるに、
此度の事のありければ、
生命も既に危きを、

纖弱き女の身ながらに
援けまつりて遙々と
里のはづれに來りしが、
俄に産氣催して
産ませ給ひし嬰兒は、
玉のやうなる美はしの——

然はあれ不意の出來事に、
何の用意もあらぬ身の
痛しや！愛しき嬰兒は
生れのまゝに抱かれて、
着せなん衣の一片だにも
持たざる事の愍然さ。」と、

優しの眼曇らせて
少女は斯くと語らふに、
藁の褥の其上に
身をやう〳〵に振り起す
産婦が面のおとろへや、——
萎れし花の落ちぬらん。

斯る姿を打見なば
誰か涙の無かるらん。
此はこれ母の施物ぞと、
持て來し品を取りいでゝ
父が寢衣を與ふれば、
眼には涙を浮べつゝ、

「實に有りがたき御惠！」と、
嬉しさ餘る彼女が面。
少女が言葉も嬉しげに、
「然らば道をば急がん」と、
別離を惜しむ眼光を
後に殘して鞭取れば、

今宵の宿泊や近からし、
車は坂路下りゆく。
後をば我の見送りて
兎やせん角やせんものと、
思ひ惑ふも暫時にて、
駒をば馳せて後追へば、

軈て彼等に追ひ付きぬ。
彼方の里に留まれる
皆に惠まん品物の
母が送れる數々は、
馬車の箱より取りいでゝ
殘らず彼女に渡しつゝ、

「次の驛に着いて後
惠の品は分つべし、
使命は汝に委ねたり。
知らせまつらん、疾く母に、
吾行く路の遠ければ、
然らば！」と言葉殘し置きつ、
互に向ふ、西東。——
鞭打つ駒の足疾く
舊來し路を馳せ來れば、
早や幾丁と隔つらん、
後振り返り眺むれど、
姿ははやも見えわかず……』

二

斯くと語らふ若人が
胸の血潮や躍るらん、
其れと知りてか、量りてか、
話上手と知られたる
藥劑師、聲も高らかに
感慨胸に湧くが如。

『何につけても獨身の
不便はあれど、寂しけど、
斯る時こそ却々に
妻子ある身に較べては、
心も安く、身も輕く、
家財は僅か持つといへ、

すはや大事の折柄は
黄金、寶石を掻い取りて
身は只獨り行くがまゝ、
(生命ありての物種子)と
昔の人も言ひけらし、——
獨在る身の氣樂さよ！』

言葉を聞いて若人が
胸の思や堪へざらん、
『憂を分ち、樂を
分けなん友のありてこそ
人、幸ありと謂ふべけれ、——
君が心の辨かぬかな！

我も思ひぬ——一度は
獨身生活の氣樂さを——
今となりては、なか〳〵に
然るべき事の誤謬と、
悟れる我身、つく〴〵と
妻てふ者の思はれて——』

息子が言葉今更に
嬉しと父や悟りけん、
『實にも殊勝の心がけ！
斯る言葉を聞くだにも、
老の前途の安けさを
眼前見る心地かな。』

同じ思に聞き居たる
母は言葉を合せけり。
『實にも眞實ぞ、汝が思！
例は前にあるものを、
夫が言葉を思ふだに
有りし昔の偲ばしく、——

想ひぞ出る——二十年の
前の火事のその時よ！
今日と同じき日曜の
安息の衣裝、華やかに
物見、遊山に、ちり〳〵に
人は皆がら出で行きつ。

町は宛然鳥の巣の
鳥飛び去りし跡の如。
殘る暑さの烈しくて、
屋根も乾ける午過を
町のはづれに、餘々と
火焔は高く揚りけり。

折から起る風強く
火焔に力合すれば、
捲くや、狂ふや、火の御神。
數多の家は見るがうちに
燒けつ、崩れつ、倒れつゝ
火の手は我家を捉へけり。

うら悲しくも避難所に
我家の燒くる眺めつゝ、
取り出し物の片ほとり
彳む夜半のいつしかと
更けぬるまゝに、睡眠神は
疲れし身をば誘ひけり。

日も出でやらぬ黎明を
冷たき夜氣に醒されて、
吾家の方を眺むれば、
烟は迷ふ——地の上。
體は重し、力無し。
起たん氣力も無かりけり。

漸々日影照りぬれば、
稍も引立つわが心。
身をば起して燒跡を
見舞はんとこそ辿りゆけ、——
庭に育ちし庭鳥の
在處や何處尋ねんと、

未だうら若き往時の
幼心のあどけなさ、
火さへ殘れる燒跡を
彼方、此方と迷ふうち、
近くも寄りて吾側に
來れる君は――汝が父。

間をば隔つ檣の關の
昨夜の暴風に破られつ。
愛馬の行方何處ぞと、
尋ぬる君の端なくも
同じ思に茫然と
相見て暫時立てりしが、――

君は吾手を握りつゝ、
「少女よ！此處に、何なれば
來つる？――危し！燒跡の
火氣に足をや焦すらめ、
いざ、もろともに來れよ！」と、
吾身を君の援けつゝ、

燒け殘りたる一つ家の
あはれ寂しき屋根の下、――
「吾子よ、汝も見るが如
吾家は甚く廢れたれ、
居らずや、我と諸共に
新の家庭を作らん」と、

言葉はいとも優しげに
小さき耳に響きしが、
邪氣無かりし往時の
胸には辨かぬ人心。
言葉の奥に潜みたる
君が心は知らずして――

（自然と湧くや、感興の
話に母は捉られつゝ、）
あゝ、今更に一つ家の
眼に入る如き思かな！
妹背の契成りてより
早や幾年か過ぎつらん。

なう、ヘルマンよ、奇しきは
縁の神の所業かな！
汝が話を打聞きて
思はず偲ぶ往時の
騒がしかりしかの時よ！
其れにも似たる物語。』――

母が言葉のやう〳〵に
終るを待つて父君は
妻が言葉を捉へつゝ、
『奇しきものは縁かな！
其れにも似たる物語、――
（汝が話は眞實にて）。

然はさりながら吾妻よ！
良きに勝たる事あらじ。
思へ！ 廢れし吾家を
今の繁榮に復すまで
夫婦が嘗めし困難を——
斯る例は世にあれど、

先つ祖が遺したる
家產を人の承け繼ぎて、
新に家を始むるに
勝れる事の何あらん、
（始めは難き）世の習ひ、
別きて難きは家の事。

市の價は日に高く、
物入り多き今の時、
誰か黃金の欲しからぬ！
然れば、息子よ！ 老らくの
父が言葉も聽きねかし！
（齡の功）もありと知れ！

汝も知るらん——隣家の
商人がかの娘——
一人を擇りて汝が妻に
貰ひ受けんは吾願。
物足る家の愛娘、
持て來る品も數あらん。

（物足りてこそ禮知れ）と、
昔の聖も言ひけらし、
日々の活計に逐はれては
何を振り向く遑あらん。——
富てふものゝなか〳〵に
安樂を謀る基なれば。

安樂を願ふそれのみか、
貧しき者を妻とせば、
春吹く風のそよ〳〵と
渡る間も暫時にて、
軈ては秋の風つらく
二人が間を隔つらん。

吾子を思ふ親心、
老の言葉も思ひ見ね！
隣の家の愛娘——
三人が中の一の姉は
嫁くべき家の定まりし。——
殘るは二人——姉と妹。

何れ劣らぬ花なれど、
一人を梅と譬へなば、
一人は勾ふ桃ならし。
人の好嗜は己がじゝ、——
妹を取るも、姉取るも
撰擇は汝が隨意ならん。』

三

言葉盡して老人が
吾子に諭す物語
道理なきにあらねども、
若き心の一念に
思は潔く、又直く、
眼には黄金も、富も無し。——

言葉優しく若人が
老いたる父に答ふらく。
『然なり、父上！我も亦
同じ思に其むかし
泉のほとり、草のうへ、
或は街に、はた市に、

隣の娘等と手を取りて
幼遊に耽りつゝ、
村が童の悪戯に
傘とも成りつ、翼とも
成りてぞ來つる仲ながら、
娘等、今は丈延びて——

嫁入る頃や近づきし、
若き女の垂れ籠めて
戸外に出づるは稀なれど、
父の仰の有る毎に
隣家見舞ふ折々の
其數さへも増りつゝ、

相見る事の間〻あれど、
彼等が擧動を思ひては
言葉交すも厭はしく、
往時と變る娘等が狀——
物言ふだにも恥かしの
優し心は何處ぞや？

他人の身姿を相見ては
彼よ、此よの品評し
女にあるまじき擧動の
其數さへも募りつゝ、
賤しき心思ひては
言葉交すも厭はしの——」

母はすかさず宥むらく、
『年端も行かぬ少女子の
言葉に罪はなかるらん。』
『否、否、母よ！　少女等が
實にも賤しき行爲を
爭でかわれの忍び得ん。』

言ふ間もあらず、父人が
面の色は變りつゝ、
『道理知らぬ吾子かな
親の心の辨かなくに、
遊びの事に氣を吳れて
學びの業は勤しまず。

天晴家の世嗣よと、
謂はせんものと心して
育てし効の有らばこそ、
今の言葉を聞くだにも、
老の吾身が恨めしく、
脆きは父の涙かな！

汝を育てし二十年の
辛苦も今は泡沫の
儚なきものと成りぬれば、
何を望みに年や經ん。
老いての後の幸福を
頼めし事の徒にして。』—

言葉暴くも宣へば
意外の事と、若人は
心に深く痛めども、
何の言葉も有らなくに、
父の怒を避けばやと、
座をば離れて去らんとす。

去らんとすなる後より
『往かんと思へば、往けよ、往け！
汝が足の向くところ、
何處へなりと往けよかし。
道理知らぬ痴者よ！』と、
言葉は甚く暴れにたり。

父が言葉は暴れたれど、
只默然と、若人は
戸に行く歩調徐ろに
他を殘して出でゝゆく。——
後には母と客人と
彼の行方を氣遣ひぬ。

第三歌

一

息子が出でし其後に
怒れる父と客人と
浮世話に耽りつゝ
暫く時の過ぎけるが、
吾子の行方氣遣はれ、
母は室をば立ちいでつ。

先づ訪づる〻門の邊や、
屢〻來寄る樹の蔭の
腰掛のほとり來て見れど、
息子が姿影なきに、
其行先や何處ぞと、
其處をば捨て〻足疾に、
厩の方に來て見れど、
其處にも彼の影は無し。
「園なる方へ行きにし」と、
僕導くそのま〻に
母屋と倉庫との間過ぎて
軈ては出づる廣園や、

枝もたわ〻に實りたる
林檎の蔭に行めば、
重う垂れたる一枝の
支えの柱傾くに、
力を籠めて女手に
柱の位置正し置き、

眼をうつす地の上、——
束の間惜しむ母人は
菜の葉の蟲も取りやりつ。
軈ては來る園の果、
青葉掩へる四阿の
邊に母は來りけり。

然れど此處にもヘルマンが
姿はあらで、寂しさの
思に母は立てりしが、
門の扉の開きたるは
彼が出でにし跡ならん、
母は然なりと頷づきつ、

出づれば、路を界して
葡萄の丘の美はしき。
流も水の涸れたれば
此は幸と徒渡り、
曲路をやゝに登り行けば、
綠大葉の愈繁く、

小暗き迄に繁りたる
葉蔭、處の狹きばかり、
垂るや、葡萄の房の數。
隙漏る日光輝やかに
黃金の玉や照らすらん、
露滴らん眺望かな。

秋を豐かに熟したる
大粒、小粒とりぐに
色は紺青、濃紫、
其味や甘からん。——
軈ては來る收穫の
其賑も偲ばれて——

暫時うつけてありけるが、
我に歸りし心地して
立ちつ、歩みつ、廻りつゝ
二度、三度ヘルマン！と、
名を呼ぶ聲の高かれど、
對ふるものは反響のみ。

例にも似ざるヘルマンが
行方何處と途惑へば、
母が憂は增りつゝ
丘をば下る急ぎ足、
足は自然と進みつゝ
廣野の方に出でにけり。

丘を後に擴ごれる
野中の路を過ぎ行けば、
收穫時の程近く、
黃金の色の愈映えて、
今年の秋を壽ぎの
狀にぞ眼奪られつゝ、

幸をば胸に畫きつゝ
吾子の行方何處ぞと、
田中の徑とめ行けば、
四方の眺望も霽やかの
小高き丘に出でにけり。
麓過るは野中道。

野中の道の側の
丘はさらでも懐しきに、
眺望は清く、草青く、
頂上立てる一本の
梨の大樹の葉は繁く、
晝は樹蔭の長閑なる。

誰か植ゑけん、何時よりぞ
梨の大樹は榮えけん、
知るもの絶えてあらねども、
雅趣ある蔭を懐かしみ、
道ゆく馬子も駒止め、
稻刈る賤も鎌を置く——

此處は休息に好き處、
梨の樹蔭はいつしかと
晝餉の場所となりにけり。——
今しも來る母人は
梨の樹蔭にヘルマンが
憩へる姿見いでたり。

二

樹蔭の石に凭れつゝ
何の思に耽るらん、
母は密かに立寄りて
強くも彼が名を呼べば、
後ろ振り向くヘルマンが
眼には涙ぞ湛へたる。

『思ひがけずよ、母上！』と
言ふより早くヘルマンが
涙を帛に濕せば、
『何をか憂ふ？ヘルマンよ！
獨り淋しき樹の蔭に
佗ぶるは何の悲しみぞ？

語れ！汝が胸の中！
語らば雨と曇りたる
眼の雲の霽れやせん。』——
吾子を思ふ恩愛の
母が言葉は優しげに
息子が胸に響きたり。

情も餘る垂乳根の
母の心は知りながら、
若き心の堪へがたく、
『無情ならずや、母上よ！
人の難儀を外に觀て
憐と思はぬ人心。——

無心なるかな、母上よ！
國の大事を知らぬげに
奮ひも起たぬ人心。——
今日見し事を偲ぶれば、
坐ろに胸の悲しくて
止めもあえぬ涙かな。

家をば出で〻徘ふに
丘の葡萄の房重く、
野邊の垂穂の目も豐に
秋の結實は滿つれども、
敵人迫る今の時
何、安らけき夢あらん。

皇國の運命思ひなば、
誰か血潮の沸らざる！——
ラインの流强くとも、
爭で防がん敵人を！——
寄せ來る敵の勢は
今を暴風と狂へるに！——

斯かる時しも徒に
强き腕をば持てる身の
斯くてあるべき面ありや？——
力は餘る若人の
空しく居らん今なりや？——
心は沸ぎつ、血は湧きつ。

義勇の隊の成りし時
撰擇に漏れし口惜しさよ！
若き此身をつく〴〵と
思へば胸の裂くる如、——
實にわが母よ！我こそは
家を繼ぐべき身なれども、
國を思へばなか〳〵に
斯くて在るべき吾身かは！
今日を限りに、母上よ！
生命は國に捧げたり。
皇國の爲めに働きて
人の龜鑑と殘らばや。

心は固し、身は強し。
生きての別れ困けれど、
母に見んも今日限り、——
いざ、此まゝに市に行き
戰爭の群に加はらん。——
再び歸る時あらじ、
再び歸る時あらじ。——
今日を限りと、母上よ！
父に暇を乞ひ給へ！
御身が息子ヘルマンが
今日を限りに出陣つよと、
告げさせ給へ、母上よ！』

三

然らでも弱き女氣の
吾子が今際の物語
聞くにつけても、暇無く
湧き來るものは涙にて、
母よ、母よと常日頃
胸をば語るヘルマンが
今日に限りて、何なれば
斯くうちつけの物語、
深き子細や潜むらん、
有りし事ども思ほへば
其れぞと思ひ知らるゝに、
母は心を飜しつゝ、

宥めの言葉優しげに
情や深く籠りけん、
『あゝ、何時の間に、斯くばかり
汝が心變りたる！——
今の話を聞く者は
誰か眞理と思はざる！

然はさりながらヘルマンよ！
汝が心辨きて知る
母の心に、何となく
辨きぞかねつる今の言。——
心に秘むる事あらば、
語り聞かせよ、母人に！』

『然らば母上！何となく
胸の思の得堪へねば、
苦しき思隱さんと、
言葉は斯くも迫りたれ。——
行途を照らす明星の
光は今ぞ消え失せつ、

何れ叶はぬ吾が願望、
友無き此世今日よりは
辿るに路の暗からん。』
心の思包みかね
若人しかく答ふれば、
母は再び諭すらく、

『思餘りて、何なれば
審に胸を語らざる？——
若かる者が習慣とて
思は止まぬ一筋の
生命も、身をも忘るらん。——
心を語れ、母人に！』

吾子を思ふ恩愛の
母が情に引かれては、
流石に心堪へ難く
急き來る涙留めかねつ。
首を胸に寄せ掛けて
體は母に凭れつゝ、

漸々に說き出すヘルマンが
若き血潮や煮ゆるらん、
『なう、母上よ！父上が
今日の仰の悲しきに、
强くはあれど、吾胸の
張りも裂けなん思かな。

餘りと言へど情なや、——
人は何處に生れ來し？
生みの母上、父上に
受けたる恩——海山の
深き、高きも幼きより
心に固く泌むものを、——

吾子の心も知らずして
情無き前の言葉かな！
胸抑へては聞きたれど、
「無下なる者よ、痴者よ」の
父が言葉の無情さや——
誰に語らん胸の奥。

假令家居は廣くとも、
假令財産は多くとも、
心寂しき若人の
何樂しみに齡や經ん。——
希望は消えし人の身の
何に此世を樂しまん。——

名譽も棄てつ、戀も捨てつ、
寧ろ此身は一思ひ、
戰の塲の朝露と
消なん勝る——と悟りしも
若き血潮の燃ゆればぞ！
手足の脈の躍ればぞ！

母よ！御身も知る如く
家なる我が起臥に
見るは——彼方の葡萄山。——
葡萄の房は秋毎に
優しき實をば垂るれども、
寂し心は愈増に……』

『實にヘルマンよ！汝が胸の
寂しさ解かぬ母ならじ。——
吾子が樂しき朝夕の
擧動嬉しむが親心。
（吾子が言葉遮りて
母の言葉は續きけり。）

美はし妻を娶らせて
新の家屋へを持たせんの
親の心も解きつらし。
打出でがたき汝が胸の
底をばわれの量らんか、——
少女を——汝は慕はずや？』

心の中を言はれては
流石に面の恥ゆかれど、
母の心も思ひやり、
若人言葉柔らかに、
『實にわが母よ！彼女こそは
我が理想の妻にこそ。

假令身分は低くとも、
假令職業は賤しとも、
驕奢も終に春の夢、——
尊貴も終に風の塵。——
位も、富も塵の世に
久しきものは愛情のみ。

彼女が殊勝の心根を
情も解かぬ隣女が
心にいかで較べ得ん！
父が言葉の今更に
思へば胸にいとゞしく、
新の疵を刻むかな！』

母は嬉しき面色に
『今は心も知りつれば、
情を知れる母親が
惡しくは事を計らじを、――
いざ！諸共に吾家に
歸りて父に見えずや。』

『いざ、ヘルマンよ！』『母上よ！』――
二人、樹蔭を立ちいで〻
丘をば下る急ぎ足。――
悲しき雲の今霽れて、
綠は增る初秋の
晴たる空の愈高し。

第四歌

一

家には父と客人と
尙も話に耽りつゝ
彼や、此やの物語、
興いや盛るをりからを
扉開くや、――母親は
吾子を連れて歸り來ぬ。

手をば取りつゝヘルマンを
夫が前に連れ行きて
母は父をば宥むらく、
『なう、わが夫よ！　諸共に
吾子の丈を相見ては
其齡數を數へつゝ、

春の曙、秋の宵、
睦みがたりの折毎に
話は出る息子が事。
樂しき時の何時時來んと、
二人の春も偲ばれて
有りし昔の懷かしく、

互に呼ばふ妹と脊の
睦まじ妻を娶らせて、
鴛鴦の契の末長き
吾子の幸を祝はんと、
彼よ、此よの人擇み
謀りし事の幾度ぞ！

待ちに待ちたる効ありて
今、其時は廻り來ぬ。
夫よ！吾子に良き妻を
神は授けぬ、娶はせぬ！
斯くてぞ固きヘルマンが
心は今や定まりぬ。

心は今や定まりぬ、
吾子に嫁を娶らせんの
時はも今や廻り來ぬ。——
花の嫁子や誰ならん。
聞えまつるは——かの娘、
さすらひ來にし異國の——

道理知れるヘルマンが
自ら擇りし妻なれば、
何あげつらふ、今更に
少女を彼に與へずば、
彼や不幸の人たらん。——
願を容れよ、わが夫よ！』

息子も口を開きつゝ、
『許諾をも賜へ、父君よ！
心は潔く、固かるに、
此身の願聽き給へ！
異國の少女もなか〳〵に
御身が心に適ふべし。』

妻子が言ふに、父人は
只に默してありければ、
聖者は口を開きけり。
『彼や、此やとひたすらに
按ずる程こそ永からめ、
運命は分る瞬間や。

運命を分くる心だに
正しくあらば徒らに
迷ふも何の効かある。
幼き時ゆヘルマンが
心は我も知り居れど、
齢にも勝る其性の——

實にや他人とは異なりて
何につけても、なか〳〵に
分別をば別くるヘルマンが、
斯る時しも良き妻を
見いでし事の道理や、
若き血潮の燃ゆるらん。』

情はあつき初戀の
妻をし娶る幸福に
あゝ、何勝る幸あらん。
友よ！許諾をば與へずば、
月は廻りつゝ、日は經ちつゝ
樂しき青春や過ぎ去らん。』

『樂しき青春や過ぎ去らん、
尊き時の過ぎもせん。
いざ、これよりは家族よ！
「急がば廻れ」の世のたとへ、
話は多に聞きたれば、
彼女が素性を探るべく、

運命は神に任せ置きて
先づ行かしめよ、我をして
彼方の村に到り着き、
任務を終へて來さしめよ！
玉か、瓦か、はた石か？——
吾眼は、よもや誤らじ。』

藥劑師が言葉は今更に
息子が心勵ましつ、
『其は幸福の言葉かな。
隣家の君よ！願くば
行きて齎らせ、家族に
嬉しさ餘る報告をば！

然はあれ願ふは、諸共に
牧師の君も連れ立ちて、
彼女が素性を糺さんに、
勝したる證明なかるべし。
金の殿に、玉の樓に
安眠詒りし人すらも、

世を覆へす革命の
強き暴風に得堪へでは、
殿をば棄てゝ徘よふに、
時代の潮に流されて
漂ひ來にし無邪氣の
少女に何の罪かある。』

二

剛腹なりし父すらも、
戀に泣きたる日のあらん、
默しかねたる青春の
血潮沸りし時あらん。
他人の言葉を聞く間に
父が怒も和みつゝ、

『妻が願もある上に、
友さへ息子を援くるか、
「老いては吾子に從へ」の
古き譬もあるものを、
心は抂げて皆人の
言葉に今は任すべし。』

『然らば父上！これよりぞ、
二人の君と諸共に
我や向はん、かの村に——
夕陽峰に殘る頃、
再び家に歸り來て、
新の娘まゐらせん。』

答も早くヘルマンは
他を殘して立ち去りつ。
厩の前に來て見れば、
主人迎へて、悠然と
黑毛の駒の立てるなる。——
軈ては食ふ飼麥の
其幾升も瞬間や、
草したゝかに含ませて、
出でんの用意成りぬれば、
轡に、紐に、はた綱と
式の如くに結ばれつ。
門のほとりに伴へば、

馬子が具備のいち疾く、
車は其處に出されたり。
駒を繫ぎて若人が
鞭取る手さへ勇ましく、
二人の客を打乘せて
出づるや疾き、家の門。
門の柳を後にして
馳せゆく駒の足疾み、
何時しか過ぐる町はづれ。
案内知りたる路なれば、
何、行先に躓かん。
或は高く、又低く、

右に、左に、田舎路を
塵をば蹴つて行く程に、
宿泊の村や近からし、
空に聳ゆる高塔の
影は次第に高まりて、
園ある家も程近く、

緑は匂ふ菩提樹の
小暗き木立廻らして、
清く藉きたる芝草の
根は幾年を固むらん、
此處は市人、村人の
遊の園と知られたり。

三

先方急ぎしヘルマンは、
路の側に駒止めつ。
『吾身は此處に待つべきに、
二人の君よ！いざさらば、
彼方の村に行きまして、
彼女が在處を探れかし。』

『永く暇は取らせじに、
吾等二人が歸りをば、
待ちませ、然らば、樹の蔭に！』
『然らば！』と言葉交しつゝ
二人が去りし其後に
待つや、寂しくヘルマンは
獨り樹蔭の廻り行き、
泉のほとりに來りけり。
石の段下りゆけば、
清く湛ふる泉水の
渚に沿へる腰掛や、
是ぞ涼しき休息場と、
腰うち据ゑつ、若人は
首を風に吹かせつゝ、
小波ゆらぐ水の面を
霎時眺めてありけるが、
何とはなしに浮び來る
胸の思は、湧くが如。
二人の未來偲ぶれば、
樂しき事の思はれて、
心も空に通ふらん。
綠の空を眺めては、
胸に湧き來る空想の
翼は高く翔りけり。

第五歌

時や移ると急ぎ足——

二人が村に着きぬれば、
家に、屋敷に、はた園に
今を群がる人々は、
車に、馬に、はた牛に
心配るに忙しく、

流に集ふ女等は
衣濯ぐに遑なきを、
憂をも辨かぬ無邪氣の
子等は樂しき水遊び。
靜けかりける昨の日の
村は今日しもどよめきつ。

車の間、人の中、
群集の中をも過ぎりつゝ
眸を見張る右、左。
尋ぬる者のあらずやと、
二人が思あせれども、
心に當る影は無く、

彼方、此方と徊よふに、
折から起る爭論を
鎭めんとてか、しづ〳〵と
一人の老者近づきぬ。
眞白の髯の嚴めしく、
是ぞ名高き裁判官。

老者は聲を張りあげて
騷げる者を叱りつゝ、
『何を爭ふ、もろともに
苦樂を嘗めし効ありや？
叶はぬ事のありといへ、
忍び合はんが此時ぞ！』

老者が鶴の一聲に
皆人默す園の中、
風吹き暴れし海の面の
波は直に靜まりて、
彼よ、此よの取成に
睦み合ふこそ可笑しけれ。

聖者は早やも見て取りつ、
『無禮なれども、御身こそ
漂泊人の其中に
長者と呼ばるゝ君ならめ、
事ある時ぞ却々に
智者も、覺者も現はれん。』

『然なり！わが代の事繁く、
思ひぞいづる、往時の
火焔の森に神顯れて
人間を救へる古譚』——
牧師の問に答へたる
老者が面は眞面目にて、
胸には興の盡きざらん、
尙も言葉を續くるに、
友の一人は傍より、
告ぐる言葉も急しげに、
少女が姿見いでんと、
二人を捨てゝ立ち去りぬ。—

老者は言葉おごそかに、
有りし時代の物語。
恐ろしかりし革命の
亂れの狀や、戰の
酷かる態や語らんと、
さしもに深き追想に、

面の色も變りつゝ、
『其れよ、亂れし時なれば、
人の心も亂れつゝ、
自由を得んも夢にして、
平和はおろか、壓制の
苛責を忍ぶ苦しみや、

野良も、畑も瞬間に
修羅の衢と變じては、
尊かりける神聖の
影は何處に密みけん。
正しかりつる人道の
蹈むべき地や崩れけん。

人を殺して血を啜り、
寶を掠め、物を取り、
或は婦女を辱しめ、
到る處に罪惡の
時をば得たる其狀を
思ふも、身の毛の彌立つこと。——

然はさりながら斯る世に、
美し話はあるものぞ！
家の安危を相見ては
垣に閲ぐも何の効、
侮辱人を防がんと
怨を棄てし兄弟あり。

國の危急を思ひては、
家も、財貨も何かせん。
戰に馳するそれのみか、
戰友の生命を助けんと、
飛び來る彈丸に胸貫きて
共に斃れし勇者あり。

又は纖弱き身ながらに、
若き男子も恥かしの
擧動ありし女あり。——
時なほ早き頃なるが、
未だうら若き手弱女が
人の去りにし後にして、

妹、子供を見張りつゝ
家に在りける折柄や、
襲ひ入りたる兵士あり、
家の財を掠めつゝ、
軈て少女に近づきぬ。
子等が驚愕如何なりし？

美し少女を見るよりや、
賤し心の湧きにけん。
翼かよわき小雀に
躍りもかゝる荒鷲か、
少女は起つや、いち早く
腰なる劍もぎ取りて、
力を限り薙ぎ伏せば、
脆くも斃る若者の
後より襲ふ曲者が
敵する遑もあらばこそ。
救を呼ばふ叫喚に
隣の人も來合せぬ。』——

『そは殊勝なる女かな！』——
牧師は感に打たれつゝ、
斯る殊勝の少女こそ、
尋ぬる者にあるらめと、
漫ろに心浮き立ちて、
胸に希望は溢れけり。

二

斯かる折しもいそ〳〵と
友は再び歸り來ぬ。——
『群集の中よりやう〳〵に
彼女が姿を見いでたり。
よも吾眼誤まらじ、
君よ、從へ、諸共に！

老たる君も伴ひて
吾行くまゝに來れかし！
吾等が希望遂げられぬ。』
友が言葉に任せつゝ
牧師は彼に從ひぬ。——
籬のほとり沿ひ行けば、

彼方に見ゆる一本の
繁る林檎の樹下蔭、
嬰兒胸に抱きつゝ
獨りの女立てりけり。
遠目に能くも辨かねども、
立てる姿の貴やかさ、

近くぞ寄りて打見れば、
輝く頰の紅は
林檎と色や較ぶらん、
滴る髪の濃綠は
樹の葉と艶や競ふらん。
姿も、眉も美くしく、

世にも稀なる嬋妍の
姿を何に較ぶべき。
況して心も美はしく、
優しきのみか、胸底に
密む健氣の有るならば、
誰かは點打つ者あらん。

『斯かる女を娶らんに、
勝れる幸福の何あらめ！
老いて便なき我にさへ、
少女は美しと見ゆるもの、
血潮沸き立つ青年が
思焦がすも道理よ。』

『障害あらずは、老人よ！
樹蔭に立てる少女子が
氏をば語れ、希くば、
聊か思ふ事あれば、
彼女が生と心とを
語りて聞かせ、老人よ！』

牧師言葉を和らげて
老いたる君に言問へば、
微笑みつゝぞ彼は言ふ。
『君問ひますか？――彼女こそは、
われ、先の程語りたる
心殊勝の少女にて、

男子に勝る擧動に
名はいと高き少女なれ。
然はれ素より女子の
心優しく、美くしく、
況して仁慈も厚ければ、
又何をかを尋ぬべき。』

斯かる言葉を打聞けば、
今更何を尋ぬべき。——
二人は老者を勞らひつ。
『此は僅なる志、
貧しき者に分ちね！』と、
牧師は金取りいでゝ、
老者が前に捧ぐれば、
彼は其手を止めつゝ、
『君が心は嬉しけど、
恩惠の品は數あれば、
取りね！』といふを、此者は、
强いて取らせつ、立ちいでつ。

袂別となれば、傍の
友も煙草を取りいでつ、
『せめては之を名殘に』と、
老いたる君に與へつゝ、
『さらば』の言葉もろともに
袖をば分つ、西東。——

三

獨り淋しき里外れ、
人の歸來を待つ者が
心は如何に急ぐらん。——
疾く歸らんと急ぎ足、
二人は園を立ちいでつ。
軈ては來る芝原や、
前の處に來て見れば、
車に身をば寄せ掛けて
暗き樹蔭の物思ひ、——
思に沈むヘルマンが
面の色の愁然と、
側に駒は立てりけり。

見るより早く手を取りて、
『多幸なるかな！ヘルマンが
撰擇は實にも過たず。
二人の幸を今更に
雙手を擧げて祝さばや』、
牧師はいとゞ嬉しげに、

『いざや、車を整へて
家に歸りつ、いち疾く
少女を家に迎へよ！』と、
言葉を甚く勵ましつ。
若き二人が未來の、
幸福を心に願ひけり。

嬉し報告を聞きてだに
若き血潮の躍らんに、
あゝ、何なれば、ヘルマンが
今、寂しらの物案じ？——
待ちし言葉と反對の
悲しき聲を絞りつゝ、

『高き希望に向ひては
車を馳せて來れるに、
あゝ、恐らくは吾胸の
願成らじと悟りては、
獨り樹蔭の物思、
我は悲しくなりにけり。——

『嗚呼、いざさらば、二人の君！
我を殘して行きませな！
待ちます母御、父上に
由をば告げね、云々の！——
此身は彼女に行き遇ひて
答を聞きて歸るべし。』

氣を取り直すヘルマンが
言葉を聞くや、諸共に
二人は馬車を整へつ。
『然らば待たんよ！』『再見』と、
離別の言葉交すれば、
駒は家路に向ふなり。

第六 歌

一

夫れ、秋の日の夕まぐれ、
野路に彳む旅人が
今、落ちかゝる日の影の
光を空に止めつゝ、
莊嚴しき姿、山の端に
春づく狀を見るが如。

眉目美はしき少女子の
獨り野路の辿りゆき、
進みも來ると打見れば、
霎時樹蔭の假睡や、
我を忘れしヘルマンが
奇しき夢は醒めにけり。

夢とは思へど奇しきに
眼見張りてつくづくと
村の方をば眺むれば、
近づき來る少女あり。
驚き見やる彼が眼に
其は幻影と見ゆれども、
二つの瓶を肩にして
泉のほとり少女子が
近づく姿よく見れば、
幻ならで、影ならで、
貴に優しき其容は、
吾戀ふ人と知られたり。

姿見るより若人が
胸も躍るや、手も舞ふや、
愕く彼女に寄り添ひつ。
『再も相見る、少女子よ！
身をも忘れて人の爲め
汝が爲す業の斯く繁き。

村にて用は足るべきに、
斯かる處へ、何なれば
遙々來にし君ならん。
涼しき水を汲み行きて、
渇ける子等に、病人に
惠まん君の心なりや？』

情は厚き若人の
言葉を聞きて少女子は
彼が心を偲びつゝ、
『復も相見る嬉しさは
あゝ、又何に較ぶべき？
仁慈は深き若人よ！

君が惠を落人の
誰か嬉しと感せざる！
再び此處に廻り會ふ
縁はさらに奇しきに、
何、故ありて水汲みに
此處迄來しと問ひたまふ？

村にも水は湛ふれど、
さすらひ來にし人々が
情もあらぬ暴行や、
牛よ、馬よと引き入れて、
水いと清き小川の
流は甚く濁りたり。』——

言ひつゝ、やをら立ちいでゝ
石の段階下りつゝ、
少女、渚に近づけば、
共に下りゆく若人も
彼女に肩をば並べつゝ、
泉のほとり立ちにけり。

軈て少女の水汲むと、
身をば屈めて窺ふに、
他なる瓶を取り持ちて、
同じ眺めの若人が
姿は、美しき少女子の
姿と共に水鏡。——

晴れ渡りたる秋空の
蒼きを宿す水の上に
二人が影は明らけく、
面はゆき迄映りけり。
若き二人が胸の中に、
宿りし影や何ならん？——

『我に飲ませよ！一滴、
君が汲みたる其水の——』
面輝く若人が
言葉は然かく響きけり。
瓶をば前に捧ぐなる
少女が頬の日に染みつ。

『問ひぞまつらん、若人よ！
如何なる用のおはすとて、
車も借らず、馬も借らず、
遠き市より遙々と、
斯かる此處へは來ませしぞ？——
故をば語れ、若人よ！』

二

言葉聞きつゝ自から
眼は地に下りがち、
思ひ惱めるヘルマンが
心の中ぞ如何ならん。
軈て首を振り起し、
少女が眼に見入しが、

戀と言はんは流石に
面恥かしき心地して、
打ち出でがたき胸の中、
少女は知るや、知らざらん。——
眼光清く見つむるに、
彼は優しく言ひいでぬ。

『いでや、語らん、少女子よ！
何をか包む――汝が爲めに
遙々來にし我なるが、
家には在ます兩親が
慈愛も厚き一人子の
吾爲す業の繁くして、

田畑の事をわが見れば、
父は勤しむ店の事。
母は内をば政むれど、
何につけても、なか〳〵に
僕婢といふは難かしく、
主婦惱ます習にて、

或は過失、輕卒、
眞實あらぬが基にして、
暇遣る事の多かるに、
母が片手と頼みつる
一人の妹の失せてより
久しき間に願とて、

手足と頼むそれのみか、
心頼みとなる程の
優しき娘のあらばやと、
母が願も我知れば、
今日しも汝に行き遇ひて
歸りし後の物語。

御身が事を語らへば、
「然らば行きて」と、母の意——
傳へんとこそは來りしか、
同じ思を告げばやと、
我も……』と言葉いひさして、
言葉は早も澁りけり。

『何をためらふ、若人！』と、
（少女は言葉挿みつゝ）
『何をためらふ、若人よ！
思のまゝに語りませ！
數にも足らぬ此身をば
御身が家の水仕女と、

望ませ給ふ上からは、
何に答を否むべき。
後の運命は兎も角も、
御身が家に從はん。
仁慈に富める家族に
仕へまつるぞ幸福の

身は今、義務果てたれば、
仕へまつりし我が主に
由をば告げつ、永らくの
別れを友に告げぬべく、
村に歸りて、さて、更に
御身が行くに任すべし。

惠を受けし吾が君に
復も遇ひなば、如何ばかり
主婦が心の慰まん。
兎にも角にも諸共に
村に歸りて、人々と
永の離別を惜ませよ！――』

二人、渚の物語――
時さへ稍々に移らふに、
少女は彼を促しつ。
『いざ起ち給へ！わが君よ
泉のほとり若き女が
永く在らんは、却々に
他人の非難を免れじ。
然はあれ涼しき水の邊に
二人語らふ樂しさよ！』
言葉と共に起ちあがる
二人が影は今更に
水に名殘を止めつゝ、
名殘を惜しむ一瞥の
二人が眼の輝やかに、
泉のほとり立ち出でゝ、
石の階段登りつゝ
靜かに辿る少女子が
後に男子も從ひぬ。

三

二人、野路の語り行き――
軈ては着きぬ、園の中。
納屋のほとりに來て見れば、
彼女が歸來を待ちやせし、
嬰兒袖に抱きつゝ
主婦は彼女を迎へけり。

二人の子等が手を取りて、
折から其處に來れるは
其名も高き老者なり。
母を見いでし喜悅に
子等は躍りつ、戯れつ、
水よ、菓子よと乞ふなるに。

瓶なる水を飲ますれば、
子等も、老者も、母人も
冷き水を掬びつゝ、
咽喉の渇癒えぬれば、
日に萎れたる青草の
露に蘇りし心地なり！

喜ぶ母を見つめつゝ
少女は意を語るらく、
『涼しき水をわが主に
捧げまつるも今日かぎり、
又遇ふ事の有りや無しやゝ？
離別はいとゞ悲しけど、

又然る時の追想に
此身を偲びもし給ひなば、
親にも勝る吾主の
厚意を思ひまゐらせて、
同じ忠實を只管に
他なる主に仕へなん。

主の安全を見まつりて
吾身も此處に安らけく、
暇を乞ひて歸らなん。
都落ちての途次、
恩惠賜ひし若人の
再び使もたらして、

此身を家の水仕女と
望み給ふも緣なれば、——
然らば御身を大切に
子等が將來を樂しみて、
幸くも在ませ、わが主！』と、——
眼には涙の露重し。

（一樹の蔭に宿り合ひ、
同じ流を掬ぶだに、
別離は悲しき習ぞかし。）——
況して難儀の折柄を
蔭ともなりつ、手足とも
成りし少女が、今更の

別離の言葉打聞けば、
嬰兒抱く母人が
胸の思や迫るらん。
外なる友も寄り集ひ、
或は涙に、はた笑みに、
又の遇ふ瀬を契りつゝ、

友の運命を思ひては、
幸をば祝ふ口々の
聲は泉と湧く中に、
手をば取りつゝヘルマンは
少女が側に寄り添ひつ、
『日は早や遲し、町遠し。——

我行く路の遠ければ、
いざや！』と言葉止めつゝ、
『さらば』の告別もろともに、
二人は皆の人々と
手を握る暇も急しく、
軈て其處をば去らんとす。

折から二人の子供等は
彼女に別離を惜しみけん。
少女が袖にすがりつゝ
聲をば立てゝ泣き伏すに、
側に在りし女等は
子等をだましつ、すかしつゝ、
『汝等が姉は、あの町に
パンをば買ひに、菓子買ひに——
歸りを待ちね、大人しく、
土産の數は澤山！』と、
言葉を聞いて子供等の
手を緩むるが、あどけなき。——

帛振る者を殘しつゝ
樹蔭を出でつ、庭過ぎつ、
二人の影は漸々に
園の彼方に隱れけり。——
家路を急ぐ二人子が
心の中や如何ならん。

第七歌

一

夕陽の光に送られて
二人は辿る野中路、——
急げる足のいつしかも
吾家近う來りけり。
折から出づる黄昏の
雲こそ深く日を包め。

隙をば漏るゝ折々の
光はいとゞ輝やかに、
黄金波打つ秋の野の
野末に影を投げぬれば、
明日の天氣や如何にぞと
人は氣遣ふ野のほとり。

豐けき秋を偲びつゝ
二人、野路の語りあひ。
少女は思ふ未來の事、
語りつ、問ひつ、行く程に、
日は山陰に隱ろひて、
暮れゆく野邊の靜なる。

少女は言葉續けつゝ
『君が諭を心して
親には仕へまつらなん、
然はあれ誰かわが君に
仕ふる術を敎へなん。』——
餘韻は耳に新らしく、

軈ては來る丘の上、
梨の樹蔭に出でにけり。
此處ぞ——即ちヘルマンが
懷しき人のあこがれに、
涙を垂れし草の上。——
涙の露のそれならで、

草には夕の露繁く、
曇れる空の、今霽れて
折から照らす望月の
光は空に皎々と、
野邊は眞晝の明らけさ、――
空には迷ふ雲も無し。

二

急きて來にし黄昏の
野路に足や疲れけん、
歩を止めて少女子は
樹蔭の石に彳みぬ。
手をば取りつゝヘルマンは
共に腰をば下しつゝ、

『汝が心に打聞きて
只爲すまゝに爲さしめよ！
打ちぞ出たる若人が
言葉は口に迫れども、
心は胸に密めつゝ
暫時樹蔭の物思。

少女は口を開きつゝ、
『さても涼しや、今日の月！
圓かに照れる其影の
光は晝と宛然に、
彼方の町に立ち並ぶ
家根も、瓦も明らけく、
高くも見ゆるかの窓の
ガラスの板も數ふべし。
あゝ、美しの今宵かな！』――
言ふ間もあらず、ヘルマンは
家の彼方を指して、
『彼方に見ゆる其家は
今しも汝を伴はん、
實に吾父の住居にて、
高くも見ゆるかの窓は
吾住む室のそれなるが、
軈ては汝が起臥の
眺めの窓となりぬべし。
廣く連なる丘の邊の
田畑は吾が家の所有、――
明日は結實を納めんに、
風も涼しき樹下蔭
共に來て食ふ草の上、
晝餉の味や甘からん。

然はれ少女よ！いつしかも
雲こそ懸れ大空に、
圓かに照れる月影の
軈ては雲に隠れなん、
いざ！わが後に從ひて
彼方の家に急がばや。』

三

彼が言葉に促され、
少女は其處を起ちいでつ。
月の光を案内にて、
二人は辿る野中路。
道は次第に高まりて
葡萄の丘に着きにけり。

葡萄の丘に着きぬれば、
月はみ空に照らせども、
廣葉繁れる樹の蔭の
道は小暗く、はた狹く、
男の手たよる少女子が
足なやむ路のたづ〳〵し。

纖弱を援け、やう〳〵に
幾坂路や下りけん、
案内知らざる少女子に
肩をば貸して、ヘルマンは
今しも來る階段の
邊に彼を伴ひぬ。

折から曇る月の影
二人が行途遮ぎれば、
踏みや惑ひし、躓きし、——
少女、男子の肩離れ、
すはや倒れん瞬間を
救ひは戀人の手に在りて、

彼女をば抱くヘルマンが
胸は少女の胸の上に、
頰は少女の頰に觸れて、
立てる姿は宛然に
石像——やゝも搖ぎなく、
暫時、少女を見つめたり。

斃るゝ者を抱き止めて
我を忘れし若人も、
軈ては覺る手の重み、
坐ろに胸の溫かく、
唇のほとりに迷ひ來る
呼吸の香のぬく〳〵し。

不圖起りたる過失に
一度胸の躍りけん、
二度君に助けられ、
痛しといふも恥かしの
聲の戰慄を抑へつゝ、
『待ちませ、暫時、わが君よ！
戸口に近く躓くは
吉からぬ兆と人の言ふ。
嬉しき前兆願ふものを、
足跛く女連れ來ぬと、
君や兩親に笑はれん。
待ちませ、暫時、わが君よ！』——

第八歌

ミューズの恵いと厚く、
互に慕ふ若者が
幸ある路は安らかに、
軈ては家に着きぬらん。——
若き男女が未來を
縁の神よ！守れかし。

一

家には父と客人と
有りける先刻の物語。
息子の歸宅待ち詫びて
思ひわづらふ母親が
門に出でしも幾度ぞ？
日はいつしかも暮れ果てつ。

美はしかりし月影の
光も雲に隱れけり。
虛空の氣色何となく
雨をば含む危うさや、
吾子の上を思ひ遣る
母の心のいぢらしさ。

妻が心のもどかしさ、
主人笑ひつ、からかひつ、
尙も客との物語。——
息子が歸宅待つ程に、
扉開くや、美くしの
二人の姿現はれぬ。

入り來る者を眺めつゝ
負けぬ、劣らぬ氣高さに、
待ち居の皆や愕きし。——
妻に望みし異國の
美し少女を伴ひて
今、ヘルマンは歸り來ぬ。

父と母とに打向ひ、
『前の少女を引き具して
歸り來ましぬ、父母！』と、
紹介の言葉倉卒に
牧師の君に寄り添ひて、
耳語く彼が忙がしの

心の程を誰か知る。——
尙も言葉を續けつゝ、
眞實は語る遑あらで、
只吾家に仕へよの
約束をなして、はるゞゝと
此處まで彼女は來れるが、

胸には迷の潜むらん。
互の迷別けんこそ
吾等が今の願なれ。——
智をば貸しませ、わが君！』と、
言ふ間もあらず父人が
言葉は强く響きけり。

『我にも似たるヘルマンが
其れよ、美しき志。
互に思ひ思はれて、
心知りたる少女子を
妻と呼ばんに、垂乳根の
何、今更に否むべき！——

我も昔は青春の
熱き血潮の燃ゆる時、
美し少女を呼び入れて
妻と呼びしは彼女ぞ。』とて、
興に任せての物語、
心に毒は持たねども、

其はうちつけの物語、
餘りの事とヘルマンは
手足も震ふ心地して、
一座默してありけるが、
父が言葉のいとゞしく
少女が胸に對へけん。

動き易かる女氣の
頰は紅にほてれども、
苦しき胸を抑へつゝ、
『今の仰を打聞くに、
心は弱き女子の
恥をば爭で忍び得ん。

同情に富める御方ぞと、
豫て聞きけん父君が
何に情無き戯言ぞ！
素性賤しき婢女が
財といふもこればかり、
包の外に持たぬ身の——

身分は高き富人の
世嗣の君を、何なれば
吾脊と呼びもまゐらせん？
斯かる差別は知るものを、
遙々此處まで來りしも
主に仕へん約束にて――』

言葉を聞くや、ヘルマンが
胸は甚くも躍りつゝ、
事の次第を、打開けて
迷誤の雲を霽らすべく、
意味ありげの眼光に
牧師の君を見やりけり。

賢しき君は進み出でゝ、
少女が面を見つむるに、
痛を胸に密めつゝ
眼には涙を湛えたる――
心の奥や試さんと、
牧師、すかさず言ひいでぬ。

『其身は人の水仕女と
承諾をば爲せる上からは、
主人持つ身の物事に
苦しき事は常にして、
汗をも垂らし、勤しみて
働く事は道理の、

人に仕ふる其身には
主人が怒、子等が戯、――
日毎に起る種々の
心に満たぬ事のみか、
侮辱、誹謗、戯言と
困かる事も多からめ。

然はあれ忍ぶは従僕の
主に仕ふる心がけ。――
主人が今の戯言に、
汝の怒も無理ならじ。
されど女をからかふに、
斯くる戯言は稀ならじ。』

二

得こそ言はざれ、胸深く
密めし希望の今更に
徒とやなりし？――少女子が
忍びかねたる哀傷の
涙は頬に流れつゝ、
面伏せての物語。

『忍びかねたる此胸の
苦痛を誰か慰めん、
御身が諭告厚くとも
爭で慰む、わが胸ぞ？——
惱める者が心には
僅の物も觸れ易し。

假令願は叶ふとも、
苦惱は漸々に增しゆきて、
何れ運命は困からん。
暇を乞ひて、諸人よ！
此身は旅に流離の
憂かる運命を生らへん。

身分賤しき婢女の
思へば恥ある事ながら、
人の言葉の例になく
心に深く泌みつるも、
心昂れるわが胸に
密める思のあればこそ。

思ふも詮なき事ながら、
今日、田舍路のめぐりあひ、
君を始めて見てしより
胸を捉へし憧憬の
絶ゆる暇もあらばこそ、
君をぞ慕ふ折柄を、

泉のほとり、わが君に
復も遇ひたる其時の
思を何に譬ふべき！
夢か、現か、幻か？——
我を天空に呼び給ふ
天つ御神の慕はしく。

恩惠を垂れし我君が
吾家へ來り仕へよの
言葉の奥に密みたる
懷しき心偲びつゝ、
軈て來らん幸福の
儚なき夢路辿りつも、

此身は君に捧げんと、
此處迄來にし身ながらに、
吾身の程を思ほへば、
涙は頰に流るのみ！
然はれ話も、盡きたれば、
心に殘る事もなし。

假令雨風は荒ぶとも、
困難に馴れしドロテーア。——
いざや、暇を乞ひまつり、
吾行く路に任すべし。
然らば！』と言葉言ひ捨てゝ
少女は室を出でんとす。

三

出でんとするを抱き止めて、
『其は抑も何の心より？――
空しき涙止めよ！』と、
言葉漏らすが、いち早く、
情に脆き女氣の
母は涙を浮べけり。

父は椅子をば離れつゝ、
『何をか騒ぐ？人々！』と、
怒の言葉言ひ捨てゝ
室をば出でん氣合なり。
思ひがけなき成行に
息子は父を宥めつゝ、
『怒り給ふな、わが父よ！
事の違ひし其罪は
吾身一人が負ふべきに、
少女が罪は免して！』と、
言ふ言の葉も忙しく
牧師の方を振り向きて、

『あゝ、わが君の何なれば
迷の雲を霽らすべく、
智者の言葉を賜はざる！
願へる事の効ぞ無き。――』
言ふ若人に答へたる
聖者は笑を湛へつゝ、

『今更何をためらはん、
自から誓へ、少女子に！
今の言葉を打聞きて
彼女が心も解きつらん。
早やわが言の要あらじ、
自から誓へ、若人よ！』

心遅れし若者が
今は少女に寄り添ひて、
『泣くをば罷めよ、わが妻よ！
心を語る遑あらで、
汝が胸を痛ませし
罪をば許せ！ヘルマンが
鴛鴦の契の末永く、
妻とや呼ばん、夫とも――』
言ひつゝ彼女の手を取れば、
迷は解けてドロテアが、
面もいつか、さはやかに
頬に喜悦の溢れつゝ、

輝く眼に見つむるに、
父も、母もと寄り添ひて、
互に彼女が手を取れば、
二人の客も近づきて、
若き男女が永久の
契を、玆に壽ぎつ。

靜けき庭を騷がせし
前の暴風は、今いづこ？——
未來に滿つる幸福を
互に胸にゑがきつゝ、
更けゆく空に、皎々と
明けき月は昇りけり。（終）

卷末の辭

作者

Die Nachtigall, sie war entfernt,
Der Frühling lockt sie wieder,
Was Neues hat sie nicht gelernt,
Singt alte, liebe Lieder. —Goethe.

春來ぬ、——
日は、うらゝかに南の窓に照りて、
芳香かぐわしき庭面を滿たす花の樹陰、
歌ふよ、うぐひす、聲もほがらに清きしらべ——
あゝ、かれ、歌人、——それは春神の愛兒と生れし、
歌鳥、汝身は淋しき死骸の冬を、しばし山に隱れ、
血の氣ぞ冷えたる、わが世を遠く離りけるが、
野山は色づき、谿間に花ぞ盛る今を、
再び野に來て、歌ふか、あはれ聲も優に、——

汝身が、み山に學びて來つるは、其よ、新の調ならで、
今、また歌ふか、耳には馴れたる、昔の、郷の歌を。
さはあれ、ゆかしや、優しき和毛の胸を張りて、
喨喨、小さき喉より、泉と溢るゝ汝がその聲、
節こそ古けれ、幾度聞くも飽かぬよ、
あゝ、げに、その一曲。

そも、また
惠か、神の——日光ぞぬるけき異國の野邊にうまれ、
美音は持たねど、同じ歌節戀ふる、我や野の鳥——
生れて素より、驚！汝が身に類へん喉は持たね、
惠ぞ普ねき、あゝ、この樂しき春に遇ひて、
なじかは、默して、徒に在らめや、あゝ、われ、鳥の
聲こそ鈍けれ、——苦しき吐息の胸を張りて、
われ、また歌はん、節はも拙き郷の歌を。

願ふは、——ほがらに、高く、清けき汝音の節に似せて、
朝日子、うらゝに東の窓射る春の曉を、
禊ぞあたゝか、安らに、曙神疾しと眠る人のま夢、
初聲高らか、醒しつ、天地どよもせ歌はなんと、
試む、この曲——情なや、詩神我には惠なきか？——
かすかに響くは、あゝ、これ、——
汝が音の、優しき調にいかで較べ得べき！
からくも、喉をば痛めて、歌ふは、
これよ、この曲。

明治四十年三月一日印刷
明治四十年六月一日發行

著作者　秋元蘆風　東京市京橋區銀座三丁目一番地
發行者　河西義郎　東京市日本橋區兜町二番地
印刷者　金澤求也　東京市日本橋區兜町二番地
印刷所　東京印刷株式會社　東京市京橋區銀座三丁目
發行所　也奈義書房　東京市京橋區銀座三丁目
取次元　左久良書房　電話新橋　三四〇番

一冊　金四拾錢
郵税　金四錢

特約大取次所

（順はろいも同不第次）

東京市神田區表神保町	東京堂	東京市本郷區元富士町
東京市神田區表神保町	東京堂	東京市本郷區本郷四丁目
東京市神田區裏神保町	中西屋	東京市本郷區元富士町
東京市神田區上白壁町	上田屋	東京市下谷區仲徒町一丁目
東京市神田區表神保町	宮下堂	東京市淺草區三好町
東京市日本橋區吳服町	二松學館	大阪市東區備後町四丁目
東京市日本橋區通一丁目	修隆堂	大阪市東區南久太郎町四丁目
東京市日本橋區本銀町三丁目	北林堂	大阪市北區東裏町
東京市日本橋區下槇町	平書店	大阪市西區京町堀通二丁目
東京市日本橋區通一丁目	太倉堂	京都市下京區烏丸通佛光寺東入
東京市日本橋區大傳馬町二丁目	直江洋書堂	京都市上京區寺町通二條下ル
東京市日本橋區住吉町	文星堂	名古屋市宮町一丁目
東京市日本橋區本石町二丁目	高山堂	名古屋市本町三丁目
東京市京橋區尾張町二丁目	青木堂	久留米市米屋町
東京市京橋區鎗屋町	淺見誠文堂	横濱市吉田町一丁目
東京市京橋區中橋廣小路	至林堂	熊本市新町二丁目
東京市京橋區五郎兵衛町	杉本書店	新潟市古町通六番町
東京市京橋區南傳馬町三丁目	翰香堂	姫路市中二階町
	東海堂	
	東明堂	
	長川文榮閣	
	前邑三松堂	
	松黑書店	

日本堂	盛春堂	得策屋
青年堂	大寶館	文川書
福音社	杉本書館	盛華堂
大文館	東枝律書房	松田書店
星野文星堂	川瀨書店	菊竹金文堂
第一有隣堂	長崎書店	萬松堂書店
木村書店		